

宮澤賢治とファン・ゴッホ

国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学教授 稲賀 繁美

本報告の前半では、ファン・ゴッホと宮澤賢治とに焦点をしぼり、一方から他方への影響という次元にとどまらず、相互照射によっていかなる作品の解釈が可能となるか、実験的な解読を試みたい。宮澤賢治がファン・ゴッホの作品に白黒の図版で接し、そこから直接的な靈感を得、ファン・ゴッホに言及する詩作をなしたことは常識に属する。だがそこでなぜ賢治はとりわけ《星月夜》のイメージに強く惹かれたのだろうか。

「ゴッホ・サイプレスの歌」を含むのは『春の修羅』だが、宮澤賢治は、オランダの画家もまたひとりの修羅であることを見抜いていた。そこで糸杉のイメージは、賢治にとっていかなる啓示だったのか。聖なる山、天に聳える頂、空にむかって身もだえするように伸びる樹木の肖像。そのかなたに輝く星と月と。それらのイマジュリーは賢治の詩的宇宙にどのように接木され、独自の展開を示していったのだろうか。

さらに自己犠牲による世界の幸福という強迫観念が、ファン・ゴッホと宮澤賢治において、共通の夢想となり、そこには、死生観にいたる共鳴がみいだされる。ふたりの宗教的芸術家の、星空への憧れは、どのように彼らの想像力に働きかけていたのか。その脈絡に迫ってみたい。さらに藝術家を星の輝きに譬える系譜のなかで、ファン・ゴッホの事例が宮澤賢治とあい照らしあう関係に置かれた、という日本の状況にも検討を加えたい。

後半、あるいは全体討議では、ファン・ゴッホの日本での受容がいかに民国期の中国において翻訳され、伝承されたかを扱いたい。20年代の上海を中心とするモダニズムの潮流のなかで、いかにファン・ゴッホは東洋の画人として尊重されるようになったのか。それはひとりファン・ゴッホに孤立した現象だったのか。近代の東洋にあって、ファン・ゴッホの受容とはいかなる意味を担っていたのか、に話題を広げつつ考察を試みたい。